

\*\*\*\*\* フィールドノート① \*\*\*\*\*

## テオティワカン「月のピラミッド」発掘記 その1

杉山三郎

現代文明は旧大陸の四大文明から始まったとされるが、アメリカ大陸でも高い技術や科学的知識を持ち、複雑な社会組織を独自の力で作り上げた高度の文明があった。南米のアンデス文明と、メキシコ・中米のメソアメリカ文明だ。欧米ではよく世界の六古代文明として紹介される。トウモロコシ、カボチャ、ジャガイモ、インゲン豆、トマト、唐辛子、タバコ、カカオなど現代人に欠かせない多くの食物を栽培化し、天

文学、数学、暦学などを発展させ、ユニークな宗教的宇宙観を持つ都市文明を創り上げていた。世界遺産のテオティワカンはその最たる巨大計画都市だった。メキシコ中央高原に紀元前後頃から6世紀まで栄え、最盛期には人口10-15万人あり、当時のコンスタンチノーブル（現イスタンブール）、唐の長安、洛陽、ペルシャのクテシフォン、エジプトのアレクサンドリアに次いで世界6番目だ。



都市の中央に位置する最大建造物「太陽のピラミッド」、エジプト最大の「クフ王のピラミッド」とほぼ同じ底面積を持つ。十万人収容可能な儀式場「城壁」がその南（上）に、「月のピラミッド」は都市の中心軸「死者の大通り」の北端（中央下）に位置する。

愛知県立大学、メキシコ政府人類学歴史学研究所、アリゾナ州立大学の国際プロジェクトは、そのモニュメントの一つ「月のピラミッド」の大掛かりな発掘調査を6年間行った。

遺跡は北回帰線より南に位置するが、海拔 2300mの高地にあるため、夏も冬も名古屋より過ごしやすい。四季感は薄く、雨季/乾季に分かれ、むしろ一日の温度差が激しい。早朝は厚手のジャケット、昼は半袖の T シャツ、夜はまたジャケットを着ての発掘作業だ。メキシコの古代遺跡は石造りの巨大建造物が多く、発掘はハードな肉体労働だ。その上各国からの研究者、学生が毎年 3、4 ヶ月一緒に生活しながら、二交代制の厳しい発掘だった。それでも、謎の古代都市、大ピラミッド内部



月のピラミッド全景

へ初めてのトンネル発掘であり、発見の期待と活気にあふれた調査で、予想以上の成果を得ることができた。

\* \* \* \* \*

メキシコのテオティワカン（神々の都）という名は、都市崩壊後 900 年ほど経って廃墟を訪れたアステカ人が付けた名前で、当時の名称は不明だ。同様に「太陽のピラミッド」「月のピラミッド」「死者の大通り」もアステカ名で、本来の名前、宗教的意味、機能も定かでない神話上の聖地であった。真の歴史を明かそうと「月のピラミッド」の中心へ向け、全長 345 メートルのトンネル発掘を行った。結果、内部に七回の建設時期が重なっていること、また増築期には生贄を、豊富な副葬品と共に埋め込んでいたことが明らかとなった。

トンネル発掘によって、テオティワカンで最も古いモニュメントをピラミッド内部に発見することができた。それによって、紀元後 100 年ごろまずモニュメントが作られ、後に規格化されたアパートメント群に住民が住み込むという、典型的な計画都



トンネル内部作業

市の特徴が推測できる。その後モニュメントは400年ごろまで増築が繰り返され、前代の建物を覆うように拡張されてきた。伝統文化の継承と同時に、絶えず“さらなる拡大と変革”を目指す、時々々の為政者の野望の跡だろうか。

\* \* \* \* \*

ピラミッド内部のトンネル発掘は全て手作業だ。埋め土から突然人骨や遺物が出てくる可能性があり、少しずつ土を取り、坑外に運び、篩にかける。保護用天井も付け、電灯のための配線と、新鮮な空気を吹き込むパイプもつけた。朝6時から夜の9時まで交代で作業し、一日せいぜい0.5-1メートルほどしか進まない。

それでも初年度から成果があった。いく



埋葬墓2出土のヒスイの人物像

層かの古いピラミッドの壁を抜け、「月のピラミッド」中心軸上から小さな貝製品や黒曜石の石刃が出始めた。さらに人骨の破片が出たとき、墓だと確信した。考古学の醍醐味を感じる、一生で数少ない瞬間である。

まだ「月のピラミッド」中心からは程遠かったが、墓の内部にいると十分感じさせる状況証拠があった。まずその広がりを確認し、安全を確保する天井を作ってから内部調査だ。一世紀に及ぶテオティワカン発掘史上、かつて出土例がない貴重な副葬品が大量に出てきた。同伴する人骨が一体しかないとわかった時、王か、と身震いした。これだけ大規模な都市国家なのに、かつて王墓が発見されていなかったからだ。結局貴重なヒスイの副葬品は付けていたが、両手は後ろに縛られた状態で発見され、生贄にされた高貴な人物と判断せざるを得なかった。生き埋めにされた動物も出土した。その後も4基の墓をピラミッド内部で発見するが、どれも王墓と思われるものはなかった。しかしピラミッドの増築期に多くの生贄儀式が行なわれ、犠牲者は人柱の如く「月のピラミッド」内に埋め込まれていた事が判明した。

同伴した副葬品は古代人の宗教、世界観、またその社会について貴重な資料を提供する。グアテマラでしか採掘できないヒスイの製品や、カリブ海の貝製品など、遠隔地から持ち込まれた副葬品はテオティワカン国家の広い影響力を暗示する。金属器がまだない時代で、蛇紋石の女性像（写真）や黒曜石製品など工芸技術の質は世界一級だ。さらに国家行事として行なわれた生贄儀式は彼らの宇宙観を反映し、神々（自然の摂理）への特殊な畏敬の念の表れであった。

\* \* \* \* \*

初年度（1998年）の現地調査は4カ月の予定が、墓の発見で9カ月に延びた。モニユメント発掘はお金と時間がかかり、予測が立てにくい。参加者も閉じ込められた悪条件の中での長時間の作業に心身ともに疲れ果て、異文化間のもめ事も増える。迷信

深い現地人夫の中には生贄墓やトンネルに入りたがらない者も出てきた。それでも調査が完了できたのは、研究者や院生が共有する探究心と、献身的な現地参加者の自らの文化への想いのおかげでと言える。一生、感謝の念に堪えない。（2008年3-4月の朝日新聞連載記事の一部を加筆修正の上、転載した。）

## 著者プロフィール

杉山三郎（SUGIYAMA Saburo）国際文化研究科（多文化共生研究所）特任教授 考古学、人類学

### ■略歴

1952年静岡県藤枝市生まれ。東京経済大学卒業。静岡で考古学の現場を経験し、1978年にメキシコに渡る。メキシコ国立人類学歴史学研究所に入所、メキシコ人研究者らと共に考古学調査を行う。1987年、メキシコ生まれの子供3人と妻と共にアメリカに渡り、マサチューセッツ州ブランダイス大学、アリゾナ州立大学にて考古学・人類学の勉学・研究を重ねる。1995年に米アリゾナ州立大学より博士号取得。専門は新大陸、特にメソアメリカの人類学・考古学。1980年から古代計画都市、テオティワカン遺跡の調査を続けているが、マヤ遺跡パレンケ、ベカン、メキシコ中央高原のカカシュトラ遺跡、アステカ王国の首都テノチティランの中心モニユメント、テンプロ・マヨール遺跡、グレーロ州の遺跡などでも考古学調査を行なっている。1998年から、テオティワカン「月のピラミッド」発掘調査団団長。

### ■これまでの研究

多くの助成研究を手がけてきた。最近の研究は、研究代表者として、基盤研究A(海外)平成18-19年度、「古代計画都市テオティワカンの発祥とモニユメント：『月のピラミッド』発掘資料の分析と解釈」(2580万円：直接経費総額)。世界遺産を扱う本研究は、2004年に発掘調査を終了し、現在膨大な資料整理と調査結果の出版準備に追われている。今後はテオティワカンの三大モニユメントを総括し、他の古



ピラミッドの前でテキーラ

代都市との比較研究も行う予定である。近著は以下。

- 2005 *Human Sacrifice, Militarism, and Rulership: Materialization of State Ideology at the Feathered Serpent Pyramid, Teotihuacan*. Cambridge University Press, Cambridge.
- 2006 “The Moon Pyramid Project and the Teotihuacan State Polity: A Brief Summary of the 1998–2004 Excavations.” Co-authored with R. Cabrera, *Ancient Mesoamerica* 18: 109–125, Cambridge University Press.
- 2006 “Dedicatory Burial/Offering Complexes at the Moon Pyramid, Teotihuacan: A Preliminary Report of 1998–2004 Explorations.” Co-authored with Leonardo López Luján, *Ancient Mesoamerica* 18: 127–146, Cambridge University Press.
- 2006 *Sacrificios de Consagración en la Pirámide de la Luna, Teotihuacan* (edited by S. Sugiyama and López Luján), Museo de Templo Mayor, INAH, and Arizona State University, Mexico City.
- 2006 “Simbolismo y funciones de los entierros dedicatorios de la Pirámide de la Luna en Teotihuacan”, Co-authored with Leonardo López Luján, *Arqueología e historia del Centro de México. Homenaje a Eduardo Matos Moctezuma*, Leonardo López, David Carrasco and Lourdes Cué (eds.), INAH, México.
- 2007 “Teotihuacan City Layout as a Cosmogram: Preliminary Results of the 2007 Measurement Unit Study.” *Measuring the World and Beyond: The Archaeology of Early Quantification and Cosmology*. edited by Colin Renfrew and Iain Morley, Cambridge University Press, Cambridge.
- 2007 “Inter-Regional Studies: Image and Symbol”, *Encyclopedia of Archaeology*. Three volumes, editor-in-chief Deborah M. Pearsall, Academic Press, New York.
- 2007 “The Moon Pyramid Project and the Teotihuacan State Polity: A Brief Summary of the 1998–2004 Excavations” (coauthor R. Cabrera) *Ancient Mesoamerica*, 18:109–125, Cambridge University Press.
- 2007 “Dedicatory Burial/Offering Complexes at the Moon Pyramid, Teotihuacan: A Preliminary Report of 1998–2004 Explorations” (coauthor L. López) *Ancient Mesoamerica*, 18:109–125, Cambridge University Press.
- 2007 「古代都市テオティワカン」、「湖上の都市テノチティトラン」、「絵文書から見るアステカの社会」、「アステカの世界観と生贄の儀礼」、「ワシの戦士とジャガーの戦士」、「スペイン人による征服」、ほか展示作品解説、『失われた文明：インカ・マヤ・アステカ展』（松本亮三、馬場悠男、篠田譲一監修）、pp. 89–146. NHK・NHK プロモーション。（分担執筆）
- 2007 「アステカ文明：発掘された巨大彫刻、テンプロ・マジヨール博物館・都市考古学プロジェクトの大発見」、『Newton』、2007年8月号、pp. 98–107

